

期末試験が終わり、高校生活もあと一年足らず。「少年老いやすく、学なりがたし」(朱熹)だっぺ。残った日々を内容の濃い時間にしてください。宗教の授業は修学旅行があるのであと3回(涙)

このプリントでは今まで、ギリシア哲学は古いけれど今も勉強する価値があるということをしつこく説明し、そして学問とは何か、その中で哲学はどういう地位を占めるかを無秩序にお話ししてきました。(読んでいるかどうか知りませんが)今回から、では哲学では実際に何を扱い、どんなことを言っているのかを説明したいと思います。それを読むと、「子供はみな哲学者だ」ということに対し、「本当に知恵を愛するのは、そんなに簡単なものじゃねえ」ということがわかんと思います。

さて、以前「哲学は驚くことによって始まる」というアリストテレスの有名な言葉を紹介しました。この「驚き」とは後ろから友達に脅かされて「びっくりしたな、もう」という驚きではありません。人は毎日毎日繰り返されることを見ても、見慣れているので驚きを感じません。私たちの住んでいる世界は、時間の中であってどんどん過ぎ去っていく。私たちの目にするもの、手に触れるものはすべて変化します。その中に暮らしながら、変化しないものがあると見つけたと思ったとき、人は驚く。このような驚きこそ、哲学をさせるようになった、というのです。おそらく歴史上、このような驚きを感じた人は少なかったし、今も少ないという気がします。だから、哲学者というのは「奇人」の類に見られるのでしょうか。こういうことに気づき、不思議に思う人が出たことの方が、驚きに値するのも知れません。

ところで、こういう驚きを体験するためには、「心の余裕」が必要です。人間はまず自分とその仲間が生きていくために、仕事をしなければなりません。そうして朝から晩まで忙しく働いていると、この「心の余裕」を持つことは難事です。でも、暇を持てば哲学や学問をするかといえ、そうではありません。現代では多くの人がこの暇を持っていますが、つまらないことに時間をつぶす人も少なくない。いつか言いましたが、人が自由にできる時間に何をするかを見れば、大体その人がどんな人かわかる。この自由にできる暇な時間をギリシア語で「スコレー」と言ったそうです。これがスクールの語源です。学校とは、自分の好きに使える自由な時間でもって自己を高める場所、ということなのでしょう。

ともかく、「この世界に変化しないもの、時間を超えたものがある」と気づいたギリシアの哲学者たちは、「それなら、それを理解する人間の内側にも何か変化しないもの、時間を超えたものがあるんじゃないか」と考えました。どういうことかと言うと、人間には感覚というものがあって、それでもって外の世界を認識します。だから、もし五感が働かなければ、外の世界を知ることができない。しかし、感覚で捉えられるものの特徴は、変化するもの、個別なものという点です。目は具体的なこの物の色を知るのですが、色そのものを知るわけではない。人は五感を全部働かせて、たとえば「目の前にいるのは犬だ」ということを知ります。

しかし、人間の活動はそれだけに留まらない。さらに、「イヌは動物だ」という知識を得ることができる。この場合、**イヌ**というものも、さらに**動物**というものも、もう個別的ではない。目の前にいるかどうかに関係ない。この場合のイヌは、「ポチ」でも「ラッシー」でもない、大きさも色も形はどうでもよい、場所や時間からも独立している。ただイヌの本質をもっているものです。逆に、**イヌ**という言葉はポチにもラッシーにも当てはまる。だから「ポチはイヌだ、ラッシーもイヌだ」と言うことができる。

ちょっと言葉の説明。個別 individual とは、一つしかないもの。それに対して普遍 universal とは、多くのものに妥当するものです。たとえば、 $2 \times 3 = 6$ は、どこでもいつでも、日本でも韓国でもペルーでも、弥生時代でも今でも1万年後でも変わりません。これが普遍ということ。(説明終わり)

この世界に存在するものは、みな個別的ですよ。イヌの例を続けますが、実際に存在するものは「ポチ」やら「ラッシー」とか、姿が目に見えて、その鳴き声が耳に聞こえるものです。それに反して、イヌというものは、外の世界に存在しない。誰もイヌが歩いているのを見たことはないでしょう。歩いているのは、「ポチ」や「ラッシー」といった現実の犬です。じゃあ、私がイヌと言うとき、それは何を意味しているのか。確かに、それは外の世界にいる具体的な犬ではない。では、もしイヌと言うとき、現実の世界に存在しない物を指しているなら、そのイヌという言葉は、空虚なものなのか。

いや、それは頭（知性）の中にあると言えるでしょう。こういう頭の中にあるものを、概念 concept と呼びます。概念が表に現れると言葉になります。この概念の特徴は、個別的でなく普遍的だということです。普遍的だから、「ポチ」にも「ラッシー」にも当てはまる。だから、「ポチもラッシーもイヌだ」と言えるのです。こういう概念を人が持つことができるということは、人には感覚以外の認識能力がある、つまり非物質的な能力を備えている、とギリシア人は考え、それをプシケ（魂）と呼びました。

さて、上の問題は中世西欧で普遍論争と呼ばれたものです。この論争は、この概念（あるいは言葉）とは何かということについてです。概念に対応するものが外の世界にあるのか、ないのか、という問題です。別の言い方をすれば、概念はなぜ生まれるのか。犬を例にとると、「ポチ」やら「シロ」に何か共通するものがあるのか、ないのか。あるならば、それは何か、という問題です。

この問題に関して、二つの極端な解答がありました。一つは概念が表すものは実際に存在する。すなわち理想的な完全なイヌというもの（それを「イデア」と呼ぶ）が存在する、個々の犬は「イヌのイデア」を部分的に持っているのだ、という考えです（代表格はプラトン。実念論）。もう一方は、「概念なんて何の意味ももってへん。『イ』という音と『ぬ』という音がくっついただけや」というわけです。これを唯名論と言います。どちらもおかしいところがあります。

プラトンの弟子であったアリストテレスは、「イデアなんて存在しない。あるのは個物のみだ」と言いました。しかし、だからといって概念は単なる名前だとは言いませんでした。つまり、概念には意味がある。言い換えると、概念が表すものがあると言うのです。でも、それは何でしょう。

もう一度問題を整理します。この現実の世界には、いろいろなものが存在している（森羅万象）が、それらはみな、ばらばらに存在する個物です。つまり、一人一人の人、一匹一匹の犬が存在するのであって、完全な「にんげん」もイヌも存在しません。しかし、このばらばらで多様な存在物を見ると、私たちはままばらばらまま見るのではなく、異なるものをグループ（哲学の言葉では「類」と「種」）に分類します。たとえば、「動物 ほ乳類 犬、猫」とか「植物 桜、栗」とか「無生物 石、金属」とか。でも、ポチやラッシーなどをイヌというグループに入れてしまうけれど、なぜそんなことができるのか。「それはそれらが何か共通のものを持っているから」というなら、でも、ではその共通するものとは何か。また、ポチとラッシーを異なるものにしてはいるものは何か、というような問題があるのです。



期末が終わって少し暇だったら、ちょっと考えてみてください。ただし、この問題は西欧でも13世紀にアリストテレスの『形而上学』や『靈魂論』が知られるまで、解けなかった難問なので、解けなくても悲観しないでください。徐々に説明できれば、と思います。

左がプラトン。指で天（イデアの世界）を指している。アリストテレスは地上を。